

「ああ、いい議論だった！」と思える議論を経験したことありますか？

人生の中で、数々の議論を経験してきた。見てきたのは頑なに自分の立場に固執し、検討や妥協もない議論だ。そこでは、「ああ、いい議論だった！」と思える議論を経験することは極めて少ない。

コルビー大学のダニエル・コーヘン教授が TED の講演「よい議論をするために」で、議論＝戦いと捉えると議論の進め方をゆがめるので、肯定的なものを生む議論の仕方、新しい議論の在り方を提案しているので紹介したい。

教授は議論を三つのモデルに分類して解説している。第1の「弁証法モデル」では議論を戦いと捉える。大声をあげたり怒鳴ったり、勝ち負けがある。議論のモデルとしてよく知られ定着している。第2のモデルは「証明としての議論」だ。数学者の議論を考えるとよい。議論は適切か？ 前提は正しいか？ 推論は妥当か？ 結論は前提から導かれているか？ ここには議論の対立は必ずしも必要ではない。第3のモデルは「パフォーマンスとしての議論」だ。聴衆の前で行われる議論で、政治家が聴衆を説得する場面を思い浮かべると分かりやすい。

「議論について語ったり、考えたりする時に通常頭に浮かぶのは戦いとしての議論モデルです。求められるのは『目標を的確に捉えた』議論です。『防御』しながら、『戦略』を整えます。相手を『粉碎する』議論が必要です。でも議論を戦いに喩えるのは議論の進め方をゆがめてしまいます。まず内容より戦略が重視されるようになります。自分達と相手の対立という点が強調され、議論を敵味方に分かれたものと見なします。予想される結果は華々しい勝利か、惨めで、屈辱的な敗北のどちらかです。こうして議論はゆがめられ、残念な事に交渉や、検討や妥協や、共同作業を妨げます。」と話す。

議論を通じてより深い理解を得られれば、議論の勝ち負けは重要でない

教授は議論を始める時に、論戦するのではなく、「論議を尽くしてみよう。皆で何が解決できるだろう？」と考えることを提案している。そして具体的に次のように事例を示す。「あなたと私が議論するとします。あなたは命題 P を信じていますが、私は信じていません。P と考える理由を聞くとあなたは説明してくれます。私はその説明に反論を加えます。あなたは反論に答え、私はさらにたずねます『それはどういうことか？ ここではどう当てはまるか？』あなたは

疑問に答え、議論の終わりには反論も質問も反対意見も出し尽くします。あなたは全てに満足のいく答えを出し、その結果、議論の終わりに私はこう言います。『君の言う通り P だ』私は新しい考えを手に入れますが、それは単なる考えではなく、明確で、検討され 論争を経た考えです。私は大いに理解が深まりました。」

さて議論に勝ったのは誰か？ 教授は続ける。「戦いに喩えると、こう言うしかありません。『たとえ理解を深めたのは私でも 勝ったのはあなただ』と。でも、私を説得することで、あなたは理解という観点で見た場合、何を得たでしょう？ 確かにその結果から、あなたはいくらかの満足を感じたでしょう。自尊心は満たされ、その分野ではプロの地位を確保できるかも知れない。でも理解の面で勝ったのは誰でしょうか？ 戦いに喩えた場合、理解を深めたのは私でも、あなたが勝ちで、私は負けになります。でも何かおかしいですよ。私を変えたいのはこの状況です。」

自分が議論するときに、同時に聴衆として、議論を客観的に見る目を持つ

肯定的なものを生む議論を生み出すために、教授は新しい議論の在り方が必要と考え、次の提案をしている。

「新しい議論の姿を考えるには 新たな参加者像を考える必要がある。次のようなことを想像して欲しい。あなたは議論をしています。しかも同時に聴衆になり 自分と相手の議論を（客観的に）見えています。自分が議論に負けるところを見ても、議論が終わる時に「いい議論だった」と言う場面を想像して欲しい。もしそんな議論 — 『いい議論だった』と 敗者は勝者に向けて言い — 聴衆と陪審員もそう言える議論ならば、その議論は いい議論のはずです。そして、そこにいるのは『私たちが目指す優れた議論をする人』なのです。」

編 | 集 | 後 | 記

夫婦も歳をとるとお互いが頑固になり、言い争いが絶えません。「夜は早く就寝してください！」という命令調の言葉に、「夜ぐらいゆっくり過ごさせてくれよ！うるさい！」の反論。大概はこれで対話は終わり、意見が出し尽くすレベルには至らない。そして妻は憤慨したまま布団にもぐりこみます。この場合でも、コーヘン教授の提案に従い、夫婦喧嘩を見つめるもう一人の自分がいると想像してはどうか。そうすれば、もっと意見を出し合い、理解が深まる ましな議論になるのかもしれない。

野尻

